

〔研究論文〕

社会力についての基礎研究
—社会力と学力・学習意欲等の関連性について—
Spadework about the social force

The social force, the academic ability and the relation of the desire to learn

森 保 之
Yasuyuki MORI

福岡教育大学教育学研究科教職実践専攻
(2017年 1月31日受理))

本研究は、「子どもの社会力の育成」のために、社会力の基礎理論を整理し、社会力を育てるためのカリキュラムについて検討することである。

社会力に関する先行研究としては、門脇厚司氏の研究がある。門脇氏は、社会力を「人と人とがつながり、社会をつくり、つくった社会を運営しつつ、その社会を絶えず、つくり替えていくために必要な資質や能力」と規定し、社会力を構成する5つの要素（要因）で整理している。それをもとに、対象学校の子どもたちの社会力を測定した。そして、社会力と成績や学習態度・意欲等との相関を調べ、社会力のある子どもほど、勉強が好きで、成績もよく、学習意欲も高いということ、さらに、社会力を育てるための連携・協働カリキュラムについて提案することができた。

キーワード：社会力 社会力の5つの要素

1 研究の背景

現在、九小協（九州地区小学校長協議会）、福岡県校長会では、研究テーマとして「社会力の育成」が掲げられ、各学校でも「社会力」育成を学校経営に位置づけ、実践を積み上げている。

「社会力」という用語は門脇氏が1990年代に「子どもと若者の異変—他者と現実の喪失—」が叫ばれている中で子どもたちに身につけなければならない力として造った造語である。それ以来、子どもの社会力の実態、社会力と学力向上の相関、社会力と体力の相関、生きる力と社会力との関係等々、社会力に関する研究が進み、社会力に関する文献、著書も数多く出されてきている。

現在、文科省では、次期学習指導要領の改訂が進められている。そこでは「社会人への基礎」を育むとして、「社会に開かれた教育課程」がキーワードとして出されている。この「社会に開かれた教育課程」を進めていく上では、次の3点が重要としている。①社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。②これからの社会を創り出していく子どもたちが、社会や正解に向き合い関わり合い、自らの人生を切り開いていくた

三者の連携・協働カリキュラム

めに求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと。③教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育をが校内に閉じずに、そのめざすところを社会と共有・連携しながら実現させること。このような動きの中で、再度、「社会力」に係わる研究を深めることにした。そこで、門脇氏の研究実績をもとに、社会力を進める背景、社会力とは何か、社会力の構成因子、社会力と学力の相関等、社会力についての基礎理論を整理し、社会力を育てるためのカリキュラムについて検討することにした。

2 社会力についての基礎理論

(1) 社会力とは何か

「社会力」という言葉は、どんな意味なのか、辞書などにも載っていない。社会力というからには、何かができる力ないしは能力のようなものだろうか。

この言葉は、1999年に出された著書「子どもの社会力」のタイトルをつけるに当たって、門脇が新しく造った言葉である。では、彼はどのような力を社会力という言葉で言い表そうとしたのか、それは端的に言えば、「人と人とがつながり、社会

をつくり、作った社会を運営しつつ、その社会を絶えず作り替えていくために必要な資質や能力」であると規定している。

人間は社会的な動物だとよく言われる。社会をつくり、幾世代にもわたり継承してきたものの文化を、人間との交わりを通して学び、身につけることなしには人間になれず、生きていくこともままならない。そういう人間の特性を前提にすれば、人間が社会的な動物であるために欠かせない資質や能力が社会力であるということもいえる。そして、彼は、上記のように「人が人とつながり、社会をつくり、作りかえていく資質や能力」ととらえると、その内容を次の2つに分けて説明できると言っている。(学校の社会力 p 14) 1つは、「社会づくりに参画する意思と運営力」であり、もう一つは、「社会を変える意欲と構想力」である。それぞれについて、詳述する。

●社会づくりに参画する意思と運営力

彼は、社会力のある人間であるかそうでないかを見極める一つの分岐点は、今現在自分が住んでいる社会の運営に積極的に関わっていこうとする意思があるかないかであると言っている。そのことを児童レベルで言えば、クラスの係活動や運営、あるいは児童会の運営、さらには部活動の運営などに積極的に関わろうとする意思や態度となってあらわれてくる。児童であればまた、自分の住んでいる地域の様々な行事や、地域で行われる様々な活動にも積極的に参加し、可能なら、進んで企画や運営にも関わっていこうとする態度となって表れてくるはずである。

このような意味での社会力のある児童は、学校についてや地域についてはもちろん、より広く日本や世界の出来事についても関心があり、新聞やテレビが放ずるニュースをよく見聞きするほか、親や教師に質問したり、インターネットで検索したりするなど、できるだけ多くの情報を入手し理解しようとする。

また、社会力に富むこうした児童には、人が大好きという性向があるのも特徴的であると彼は言っている。知っている人との交流を大事にするのは言うまでもないとして、全く面識がない初対面の人に出会っても臆したり敬遠したりすることなく、むしろ好奇心を募らせ積極的に質問し、理解することに躍起になりさえするくらいである。

彼は、社会力のおおもとは**他者への関心であり、愛着であり、信頼感である**とも説明し、社会の運営に積極的に関わるようになるかどうかは人間が好きかどうか、様々な他者への関心が強いかどうか

にかかっていると言っている。

●社会を変える意欲と構想力

社会力についてのもう一つの特徴は、今ある社会の運営に積極的に関わるだけでなく、さらに進んで社会の現状をもっとよりよくする意欲があり、それを実現するためのアイデアを構想する力があり、そして、それを実現するための具体的な策を考え実行に移していく能力も、社会力の重要な内容である。

社会の運営に積極的に関わろうとする人間は、それだけ社会の在り方にも前向きな態度の持ち主であることが多く、そうした態度はそのまま社会を変えていく方向に進み出ていくものである。しかし、社会の運営に積極的である人間が全てそうであるわけではない。では、何が、社会の在り方を変えようとするまでに進み出るかそうでないかを左右するのであろうか。彼は、「社会を変えよう」と進み出る人間には、多かれ少なかれ、他人を利することをよしとする利他的な価値観の持ち主が多い。このことから推測するに、社会を変えよう」と進み出る人間は、自分の利益だけを考えているのではなく、他の人の利益も考えながら行動する人間であり、さらには他の人のために自分の時間とエネルギーと資金を費やすことを喜びにできる人間が多いということである。」と言っている。

また、彼は、「社会力」と「社会性」との違いを次のように述べている。「社会性という用語は、今ある社会に適応することを第一義としており、望ましい社会を構想し、それを基に社会を作り変えていくことを意味してはいない。社会の運営に積極的に関わり、よりよい社会をつくっていこうとする意欲、そして、よりよい社会を実現していく知識や能力が豊かにあること、こういう資質や能力を表す言葉がないとすれば、新しい用語を用意するしかない。そう考えて作ったのが社会力という言葉である。」と。

このように彼の社会力に対する考えを整理すれば、社会力の真価は、社会への強い関心から、社会の改良と変革に向かうことにあるのであり、他者への熱い共感を動力にして、利他的行動ないし、向社会的な行動へと向かうところにあると考えられる。

(2)「社会力」と「生きる力」の関連性

「社会力」と「生きる力」は、どのような関係でとらえたらよいのでしょうか。

「生きる力」は、文部科学省が好んで使う言葉である。それは、1996（平成8年）年7月の第15

期中央教育審議会答申（第1次）－「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」で提唱されたものである。そこでは、生きる力は、①確かな学力－知識・技能に加え、自分で課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、②豊かな人間性－自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、③健康・体力－たくましく生きるための健康や体力、などからなるとされた。また、その答申を受けて、小・中・高等学校に「総合的な学習の時間」が新設された。しかし、その後、いわゆる「ゆとり教育」が子どもたちの学力の低下や学習の階層分化などを引き起こしたとして政策転換が余儀なくされ、授業時間数・学習内容の増加や道徳教育の推進などが図られ、それに反して「総合的な学習の時間」については授業時間数が削減された。

ここで取り上げる「社会力」とは、前述したように「社会をつくり、つくった社会を運営しつつ、その社会を絶えず作り替えていくために必要な資質や能力（子どもの社会力 p61）」のことである。その社会力の基盤となる能力は、①「他者を認識する能力」と②「他者への共感能力ないし感情移入能力」の2つであると彼は言う。①の他者認識能力とは、「社会生活をともにしている人たちがそれぞれどんな社会的位置を占めて行動しているかが分かる」とともに、「相手の立場に立って、あるいは相手の身になって、ものごとを見たり考えたりすることができる」ということである。②の他者への共感能力（感情移入能力）とは、「相手の立場や相手が置かれている状況についての理解があり、また相手がそのような立場と状況にあって、何を考え何を欲しているかも分かっている。それゆえに、その相手に対して同情的かつ好意的な感情を寄せることができることである。「思いやり」という言葉があるが、まさに相手に対して好意的「思い」を「遣（や）る」ことである。

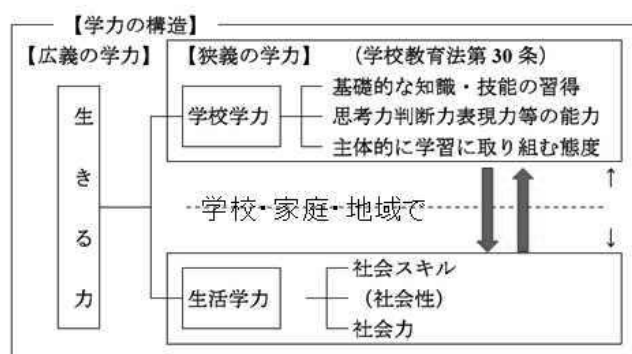
そして、彼は、「文科省が唱える「生きる力」には社会力が含まれており、「社会力」は「生きる力」の核である。「社会力」は学力である」「社会の現状に関心を持ち、社会の運営にかかわり、社会をよりよくする営みにもコミットしようという態度が身についてさえいれば、結果として、基礎的な学力も高くなるし、そういう結果になるのは理にかなっている」と言っている。

また、彼は、今日、「非社会化」「社会化不全」現象が一層強まり、かつ地域的にも年齢的にも広まりを見せている中で、共に生きることを是とし

核とする共生社会－「互恵的協働社会」（社会を構成する誰もが、一人一人の能力の多寡にかかわらず、お互いに自分の能力を他の人たちのために役立てて活用することで成果をあげ、成果を分かち合うことで互いに感謝し感謝されることを喜びにして生きていける社会）の実現を図る必要があると言ひ、それは「人が人とながり、社会をつくる力」である社会力を育てることで十分可能であると言っている。

以上、彼は、「子どもの社会力」（岩波新書1999年12月）以来、「社会力」に関する著書を矢継ぎ早に刊行して地域や学校で社会力を育てる必要性や重要性を説き、「社会をつくり、社会を変えていく力こそ、真の学力である」という学力観に立って、「産業社会に役立つ人間を育てる教育から脱却して、個々の人々の善き生と社会の健全な発展を両立させる教育へと一刻も早く、教育の目標を転換しなければならないとしている」（社会力を育てる p171）。

児童生徒が実社会に参加しながら、形成者として社会を担っていく21世紀初頭という時代を主体的に生きていくために、これからの学校教育で育成することが求められる「学力」とはどのようなものであろうか。また、社会力、生きる力との関係をどう捉えたらよいのであろうか。この問いに応えるために、学力を大きく広義の学力（生きる力）と狭義の学力（学校学力）に分けて整理をし、次図のように構造化した。



※学校学力については、内容的学力（実質的側面）と方法的学力（機能的学力）の2側面からでも整理できる。

最も広義の学力は、図全体の「生きる力」の全てと考えることができよう。したがって「学校学力」だけでなく、「生活学力」（これは体験を通して学ぶので「体験学力」と表現することもできる）もその内容として含むことになる。社会での生活という側面からとらえた「生活学力」では、社会生活を営んでいく上で必要不可欠な「社会的スキル」、

社会に適応しながら対人関係をつくっていくことができる「社会性」、社会をつくりそれを運営・改善していく「社会力」などとして位置づけられる。

狭義の学力とは、学校で育成する「学校学力」そのものであり、具体的には、学校教育法第30条で示されている①基礎的な知識・技能の習得②思考力・判断力・表現力等の能力③主体的に学習に取り組む態度の3つである。文科省が言う「確かな学力」は狭義の学力である「学校学力」と同義のものと規定する。そして、「学校学力」と「生活学力」を車の両輪として「生きる力」が身につくと考えられる。

3 社会力を測定する

(1) 社会力の内部構造

社会をつくっていく力である社会力が生きる力の中核をなす力であるとして、では、社会力があるとはどういうことか、社会力のある人間にはどのような行動を取る傾向が見られるのか。社会力豊かな人間としての特徴はどのような形になって表れるのか。この社会力のあるやなしやその程度を図ることはできるのだろうか。この問いに、彼は、社会力の内部構造を明らかにしている。彼は、もともと社会力のおおもとである他者への関心と愛着と信頼感がどれだけあるか、それに大人との交流や愛着がどのくらいあるかを具体的に質問文にして、その質問項目が社会力なる資質能力を測定する項目として妥当なものかを調査している。その結果が次頁の表（表1）である。

◎社会力を構成する5つの要素

こうして得られた結果を基に社会力を構成する要素と社会力なる資質能力の内部構造を検討している。彼は、結果から社会力なる資質能力は、第1因子から第5因子までの大きく5つの要素から構成されると言っている。そして、5つの要素(因子)それぞれの特徴ないし性格を表すのにふさわしい名前をつけ、それぞれの特徴を整理している。

○第1の要素(因子) 大人への信頼と親近感

第1因子を構成する項目に共通する内容は大人との日常的な交わりと大人との交流によって培われる大人への親近感であり大人への信頼感である。社会力の有無や程度を左右する第一の要素は、大人を「意味ある他者」として取り込んでいるか否かである、ということを示唆している。

○第2の要素(因子) 他者への配慮と思いやり

第2因子を構成する項目に共通して見られる特徴は、他の人のことに対する心遣いや思いやりが強いことである。他者とともにいることが喜びになり、他の人のためになることをするのが当たり前になっていることが社会力がある人間であることの証であることを示唆している。

○第3の要素(因子) 旺盛な知的好奇心

第3因子は、まだ知らないことや、これまでやったことがないことに対する旺盛な好奇心であり興味関心の強さであるといえる。社会力のある人間は、学習意欲や挑戦意欲、達成意欲も強い人間であることを教えている。

○第4の要素(因子) 見知らぬ人への関心

第4因子になると説明力(寄与率)がかなり弱くなるが、その特徴は、未知の人々への関心が強く、「社会学的想像力」があることである。このような特徴は、身近にいる人間に親近感を持ちかつ信頼を寄せている人間は、未だ出会ったことがない人間にも関心を寄せ、それゆえ関連情報にも敏感である人間であることを示唆するものである。

○第5の要素(因子) 人間への信頼感

第5因子になると説明力が一層深まり、その特徴が分かりにくくなるが、人間一般への親近感と信頼と理解であるとしてよいだろう。社会力のある人間は、見知らぬ人への警戒心がなく、誰とでも心を開きオープンマインドな心でつきあうことができる人間であり、人間を基本的に信頼している人間であることを教えている。

因子分析の結果を上記のように整理して改めてその重要性を思い知らされるのは、子どもたちが社会力のある人間として人間形成できるかどうかを左右するのが、大人とのつきあいや交流がどれだけ多く頻繁になされているかということである。彼は、著書の中で「子どもの本当の友達は大人である」と繰り返しているが、まさに上記の結果はその裏付けるものである。

(2) 社会力の測定項目

彼は、上記のように、社会力を構成する因子を5つの要素で分析するとともに、測定項目を明確にした。さらに、この5つの要素をもとにして、社会力を測定するための診断テストとして、彼の指導のもとに学研から表1のように20項目からなる診断テストが作成された。

表1 学研版「社会力診断テスト」(2000-2001年版)

●あなたは、自分で自分のことを考えてみて、次にあげることは、あなたにどのくらいあてはまると思いますか。それぞれについて、1から5の中で、もっとも近いものを1つえらんでください。

5. 全くそのとおり (とてもよくあてはまる) 4. そのとおり (まあ、あてはまる) 3. どちらともいえない
2. あまりそうではない (あまりあてはまらない) 1. 全くそうではない (全くあてはまらない)

第1因子	大人への信頼感	①近所のおとなの人とも、よく話をする。 ②おとなの人に教えてもらいながら、いっしょに何かをするのが好き
第2因子	他者への配慮	③クラスに新しく入ってきた子がいると、すぐになかよくなりたくなる ④他の人から話を聞くのが好き。 ⑤友達に、何でもよく話をする。 ⑥友達だったら、その人の気持ちがよく分かる。 ⑦困っている人を見ると、助けてあげたくなる。 ⑧だれかに注意されたりすると、ありがたうと言いたくなる。 ⑨友達の顔を見ると、どんな気持ちかよく分かる。 ⑩友達とけんかした後は、自分からあやまったりして、なかなかおりする ⑪友達から、いろいろ相談されたり、困ったことを話されたりする。
第3因子	知的好奇心	⑫知らない人に会うと、いろいろ質問したくなる。 ⑬知らないことがあると、知っている人に教えてもらいたくなる。 ⑭自分で正しいと思ったことは、だれにもきちんと考えを言う。 ⑮いろいろなことに興味があって、いろいろなことをやってみたくなる
第4因子	未知の人への関心	⑯友達が悲しそうにしていると、自分も悲しくなる。 ⑰知っている人がうれしそうにしていると、自分もうれしくなる。 ⑱テレビのニュースを見たり、新聞を読んだりするのが好き。
第5因子	人間への信頼感	⑲どんな子とも、なかよくなりたくなる。 ⑳一人でいるよりも、おおぜいの人といっしょにいる方が好き。

(3) 社会力診断テストに基づく社会力の得点化

ここでは、学校の子どもたちの社会力の診断テストを行い、その結果をもとに得点化する。

表1の社会力診断テストを用いて、点数化してみる。まず、第1因子～第5因子までを20項目の質問文があるので、回答は、「5. 全くそのとおり、4. そのとおり 3. どちらともいえない 2.

表2 【(SH小学校)社会力の20項目の総得点の分析】

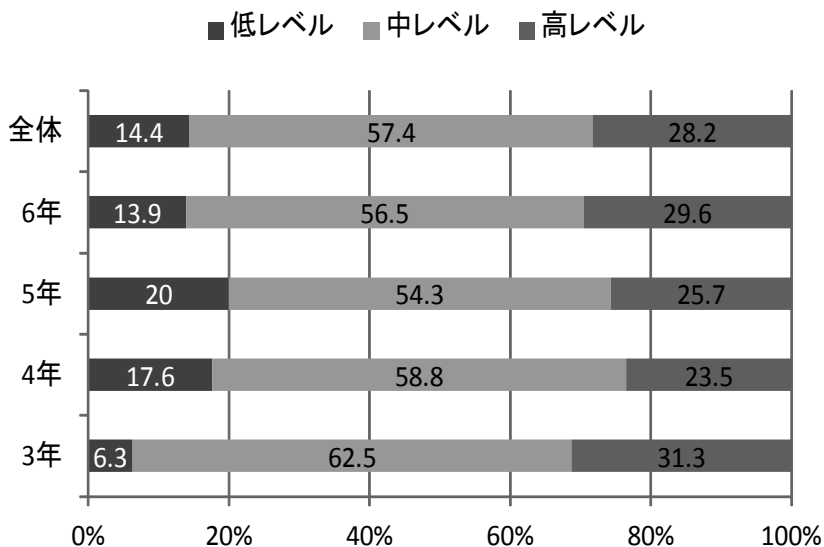
あまりそうではない 1. 全くそうではない」という五つの選択肢のどれかに○をつけ、その合計で社会力を得点化した。つまり 100 点満点中〇〇点ということで 100 点に近い得点が社会力が高いことを意味し、100 点より低くなるほど社会力が低いことを意味する。

今回の調査では、回答者全員を計算し、その分布を見て、得点が 60 点以下の子どもを「低レベル」、61

点から 80 点までを「中レベル」、81 点以上を「高レベル」として整理した。実施校は福岡地区の SH 小学校（全校児童 836 人の大規模校である。

2013 年 7 月実施）6 年児童（108 名）5 年児童（115 名）4 年児童（124 名）3 年児童（132 名）校である。

SH 小学校の全体で見ると、高レベルが 28.2 %、中レベルが 57.4 %、低レベルが 14.4 %になった（表2参照）。社会力が高いといえる小学生は 3.5 人に 1 人いるということである。そして、どの学年も男子より女子の方が高い結果になった。学年間の特徴としては 3 年生が低レベルの子どもが少ない傾向



が見られるが、他の学年についてはあまり変わらない状況（低レベル：中レベル：高レベル＝2：5：3程度）であった。

4 社会力と成績や学習態度・意欲等との関連性

社会力のある子どもは、他者への配慮にも長けており、他者への配慮が長けた子どもは、知的好奇心が旺盛であり、そのことは強い学習意欲となって表れ、学力を向上させることにもなっていると考えられる。そこで、社会力の程度を図るための質問と並べて、成績、主要4教科の好意度、学習意欲、勉強時間、テレビの視聴時間、手伝い、地域行事等への参加度についても質問をした。そこで、こうした質問への回答と社会力の程度の違いがどう関連しているかを検討した。

表3 社会力と成績・教科好意度・学習意欲・勉強時間・テレビ視聴・手伝い・地域行事参加との相関関係の調査結果 SH小学校嫌腫 (3年(132名)、4年(124名)、5年(115名)、6年(108名))				
項 目		高レベル	中レベル	低レベル
①成績 (5. とてもよい、4. よい の割合)	6年	11.0	7.3	1.0
	5年	14.3	14.3	2.9
	4年	13.6	10.7	2.3
	3年	23.3	21.7	2.2
②国語 (楽しい・好き 5・4段階 の割合)	6年	20.2	16.5	1.0
	5年	25.7	17.1	0
	4年	26.0	24.3	0.6
	3年	25.6	23.3	0
③算数 (楽しい・好き 5・4段階 の割合)	6年	24.8	17.4	2.8
	5年	14.3	22.9	8.6
	4年	27.7	21.5	7.3
	3年	31.1	25.0	2.9
④社会 (楽しい・好き 5・4段階 の割合)	6年	25.7	22.9	3.7
	5年	21.4	20.0	5.7
	4年	32.8	24.9	6.2
	3年	33.3	26.1	3.9
⑤理科 (楽しい・好き 5・4段階 の割合)	6年	25.8	24.8	3.7
	5年	42.9	25.7	11.4
	4年	45.2	40.7	10.2
	3年	42.2	28.9	6.1
⑥学習意欲 (5・4段階 の割合)	6年	24.8	16.5	1.0
	5年	22.0	20.0	2.9
	4年	31.6	23.2	3.4
	3年	32.8	28.3	3.9
⑦勉強時間	6年	13.9	11.9	0

(2時間～3時間、3時間以上)	5年	15.7	11.4	0
	4年	7.3	5.1	1.7
	3年	3.9	2.8	0
⑧テレビ視聴 (30分以内、30分～1時間)	6年	13.8	21.1	4.6
	5年	17.1	20.0	8.6
	4年	11.3	20.9	8.5
	3年	7.2	22.8	3.3
⑨手伝い (5・4段階の割合)	6年	31.2	26.6	4.5
	5年	35.7	34.3	5.7
	4年	33.3	31.6	5.6
	3年	32.2	27.8	5.0
⑩地域行事への参加 (5・4段階の割合)	6年	31.2	25.7	4.6
	5年	22.4	22.9	8.6
	4年	35.6	15.3	9.0
	3年	32.2	27.2	3.3

結論的に言えば、表3のように、社会力のある子どもほど、勉強が好きで、学習意欲も高く、成績もいいと言うことがいえる。

(1) 社会力のある子どもほど、成績がよい

3年から6年までのどの学年を見ても、社会力がある子どもほど成績がよいという結果がはっきりと出ている。社会力の高い高レベルの子どもで成績のよい子どもは、どの学年も30%以上もいることが分かる。

(2) 社会力のある子どもほど、勉強が好きで、楽しく勉強をしている。

国語であれ、算数であれ、理科、社会であれ、社会力のある子どもほど「大好き・好き、楽しい」と答える割合が多くなっている。このような関係は、5年生（算数）を除いて、3年生、4年生、6年生ともまた区同じ傾向である。社会力がつけば、それだけ勉強することに興味を募らせ楽しんで学ぶようになることを示唆している。

(3) 社会力のある子どもは学習意欲も高い。

社会力のある子どもは成績もよい。それだけでなく、社会力のある子どもは、今の成績に満足しているわけではなく、「もっともっとよくしたい」という学習意欲も高いことがいえる。社会づくりに意欲を燃やせる子どもは、学習意欲(向上心)があり、知識欲も旺盛で、頑張り屋でもあるということが言える。知識量の増加が社会への関心を高めるのではなく、人間と社会への熱く深い関心と関わりこそが、知識量を増やすということを再認識すべきである。

次に、社会力のある子どもとテレビ視聴との関係については、どの学年も社会力の高い子どもがテレビ視聴が短いという結果になった。

(4) 社会力のある子どもは、手伝いや地域行事へ

の参加も多い

社会力の高いレベルの子どもほど、手伝いをしたり、地域行事へ参加したりすることが多いことが分かった。(但し、5年においてはわずかであるが、高レベルと中レベルの子どもが逆になっている。)これは、社会力のある子どもは、地域の人の関わりも多く、また、他者への配慮もよくできるので当然の結果であろう。

(5) まとめ

以上、福岡地区のSH小学校の子どもを対象に、社会力の総得点の分析及び社会力と勉学態度や成績等との関連を見てきた。

結果として、生きる力の中核となる社会力が高くなるほど、学校の成績もよくなるし、学習意欲・好意度も向上するという関連性があることを確認できた。また、手伝いや地域行事への参加についても社会力の高い子どもの方が高いことが分かった。

表4 「社会力」を創造する場

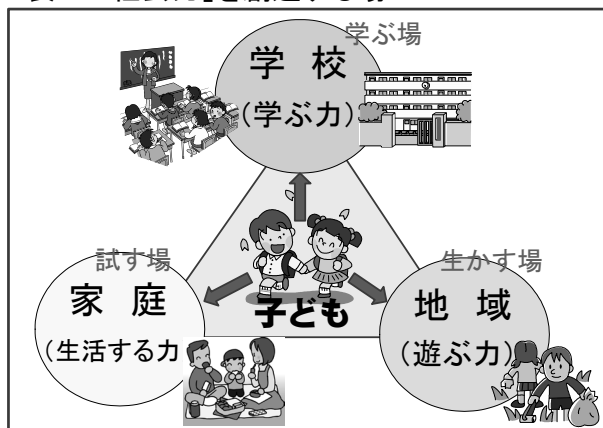
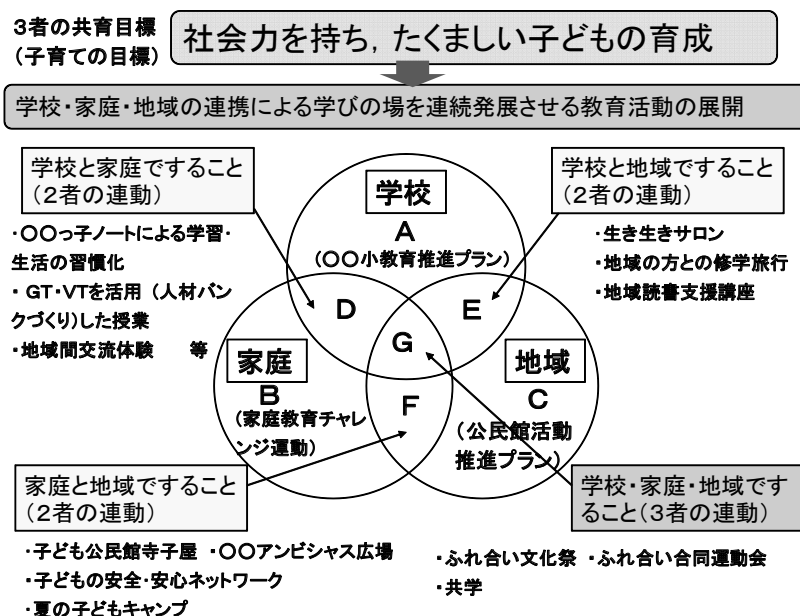


表5 学校・家庭・地域の三者による連携協働活動



5 社会力を育むカリキュラムの構築

(1) 社会力を創造する場

社会力は、学校の中だけで育つものではない。地域の力を借りながら学校教育の中で、あるいは、子どもたちが過ごす地域の中で身につける実践的な力である。つまり、社会力は、学校と家庭と地域が一体となった一つの「共育ドーム」の中で育つと考える (表4)。

(2) 学校・家庭・地域の三者による連携・協働活動の展開

学校と家庭・地域の連携については、表5を参照してほしい。3つの円はそれぞれ学校、家庭、地域の取組を表している。まず、A、B、Cはそれぞれ学校、家庭、地域による単独の活動を表している。Aは、学校の独自の活動である。学校行事「観劇会」を地域住民と一緒に鑑賞する会、保護者地域住民を対象とした道徳教育研修会の開催等がなされている。Bは、家庭の生活力を高めるための保護者の活動である。新課程教育宣言運動 (早寝・早起き、朝ご飯運動) やスマホ宣言、ノー携帯デー・ノーテレビデー、挨拶運動、親子読書活動などの活動がなされている。Cは、社会に生かす力を高めるための地域の活動である。通学合宿、〇〇町社会力育成塾などの旺盛な活動が展開されている。また、見守り隊としての安心安全の活動、夜間パトロール、放課後の見守りの活動なども見られる。

次に、Dは学校と家庭が連携した活動、Eは、学校と地域が連携した活動、Fは家庭と地域が連携した活動、Gは学校・家庭・地域三者が連携した活動を表している。

Dの活動としては、親子でつくる弁当の日、家庭学習の習慣化のための強化週間、学校・保護者の協働によるキャリア教育等がある。Eの活動としては、子どもと菓子店との協働による新作菓子づくり、高齢者との関わりを通して優しい心を育てる生き生きサロン、大学生ボランティアを活用した英語学習、地域の願いに応える生徒の地域応援隊、「ステイデント・コミュニティ」による地域貢献活動等がある。Fの活動としては、家庭・地域主催「公民館寺子屋」、地域の人が教え地域の人と共に学ぶ「南中カレッジ」等がある。Gの活

動としては、教育支援ボランティア「生き生き先生」による共育活動（〇付け先生）、地域・保護者と共に学ぶ「よのなか科」の取組等がある。この中で学校のカリキュラム（教育課程）にかかわるものは、A、D、E、G領域である。中でもD、E、G領域は、学校と家庭・地域連携・協働に着目した領域である。この連携・協働カリキュラムには、下記のような4つのカリキュラムが考えられる。

～地域連携・協働カリキュラム～

①地域に貢献・還元するカリキュラム

◎学校での学習を子どもたちが地域へ還元・寄与へとつなぐ授業

活動例) 地域生き生きサロン、総合（和菓子を作ろう）、社会科（コンポストによるゴミ問題、クリーン作戦等

②地域を生かすカリキュラム

◎地域の教育資源（ひと・もの・こと）を生かす授業

活動例) 戦争体験の語り部を招聘しての歴史学習、地域の職場体験活動、地域名人と昔遊びをしよう 等

③地域を学ぶカリキュラム

◎地域の文化や歴史等を学習内容として取り上げる授業

活動例) 社会科「私たちの町・みんなの町」「私たちの願いを政治へ」等

④地域とともに学ぶカリキュラム

◎地域の人とともに活動・学習をする授業

活動例) 地域合同運動会、地域合同フェスタ、親子進路学習会、共学「環境問題について考えよう」 等

現在、学校運営協議会を設置している学校（コミュニティ・スクール校）では、上記のように様々な学校、家庭、地域の三者による連携協働の活動が旺盛になされている。

このような活動を上記のような連携・協働の視点から見直し、社会に開かれたカリキュラム（教育課程）として再編し、実践を積み上げていくことが、子どもの社会力の育成につながると考える。

○おわりに

今後は、子どもの社会力育成のために、各学校で取り組まれている連携・協働活動の有効性を追究すると共に、創意工夫ある連携協働活動の開発を進めながら、子どもの社会力を育てる連携・協働カリキュラムを構築していくことである。

【参考・引用文献】

- 門脇厚司著 筑波学院大学紀要第1集 P15-27「社会力の構成要素と学力との関連性に関する試論」2006
- 門脇厚司著「子どもの社会力」岩波新書 1999
- 門脇厚司著「社会力が危ない」学習研究社 2001
- 門脇厚司著「学校の社会力」朝日新聞社 2002
- 門脇厚司著「社会力がよくわかる本」学事出版 2005
- 門脇厚司著「社会力再興—つながる力で教育再興—」学事出版 2006
- 門脇厚司著「社会力を育てる—新しい学びの構想—」岩波新書 2010
- 門脇厚司・佐高信著「大人の条件」岩波新書 2001
- 春日市教育委員会編著「春日市発！コミュニティ・スクールの魅力」ぎょうせい 2011